

そんな自分を、自覚してしまった。もう、知らなかった頃には戻れない。

けれど、いずれ臨也から言うのとわかりきっている別離。ならば、今から覚悟をしておこう、と帝人は思う。覚悟をしていれば、少なくともみつともない態度をとることはないだろう。彼が飽きたら、自分は領いて了承する。そうしなければならぬ。縫るようなまねはしたくなかったし、しても無駄だと知っている。

(大丈夫)

その日は必ずくるだろう。今日か、明日か、一週間後か。それはわからないけれど、確実にやってくる。必ず、臨也はこの関係に飽きる。今までと同じように。けれど、覚悟さえしておけば帝人は笑って領ける。それくらいは、自分にだってできる。できるはずだ。

決意して、そつと息を吐く。期限は臨也が飽きるまで。飽きたら恋人ごっこは終わり。最初からそういう約束だった。それなのに、今はこんなにも覚悟が必要になっている。そんな自分が、ひどく滑稽でおかしい。

考えごとをしていたからか、アパートはすでに目前だった。自分の中で一応の結論はでたので気持ちを切り替えることにし、ついでのように今夜の夕飯について考える。

当初の予定では臨也と過ごすつもりだったので、彼の希望次第としか考えていなかった。けれど、きつと彼はあの二人の女性と、もしくはどちらかと過ごすんだらう。そう思うと再び心がざわつくが、それは仕方のないことだった。

当然のこと、仕方のないこと。わかりきったこと。だから諦めることを帝人は覚えることにする。

そうしてさらに一步、もう一步と歩を進めていたが、突然後ろから抱きすくめられた。

「ひゃっ？」

何事かわからず思わず素っ頓狂な声が自分の唇から漏れる。

「急用って、自分のアパートに戻ることであったんだ？」

とがめる口調で告げられる言葉。その声音は、間違いない。今考えていた人物だった。

「臨、也……さん？」

「うん」

なぜ。どうして。だって彼はハンズ前で女性たちと話していて、自分は彼と目が合う前にそこから去った。それなのに、どうして彼がここにいるのか。

「急用あるなら早くすませてよ」

「何、で」

「デートの約束したんだから、帝人君は俺とデートする義務があるし、俺はデートしてもらう権利があるよね」

いかにも当然、とばかりに臨也は言う。自分は仕事を理由にキャンセルしたくせに、帝人にはキャンセルを許さないらしい。そんなわがままも、今なら彼らしいと苦笑を浮かべるだけだ。どんな言動をしても、もはや恋する理由にしかない。幻滅なんて、するならとづくにしている。それでも好きだと、今はそう思うばかり。